

論文を書いている暇はない？ まあそう言わずに！

鈴木克明*

*熊本大学大学院 教授システム学専攻

数年前に国際産学連携プロジェクトとしてアメリカの研究者とともに日本にこれまでにない形の教育プログラムを手がけたことがあった。オンライン大学院のストーリー中心型カリキュラムへの再設計と実施である。その際に、助言者として関与してもらった米国の若手研究者が、あまり論文を書いていないことに気づいた。「あなたの主張を引用したいと思って調べたのだが、良いものが見つからなくて困っている。どこを探せばいいか教えてくれ。」単刀直入にそう聞いてみたところ、あまり論文として形にしたものはないと言う。

「論文を書いている暇があったらより良い実践をつくるのが急務。教育現場はより良い実践を求めている。それに注力するのが研究者の責務だと思っている。」これには驚いた。でも、論文を書くことと新しい実践を切り拓くこととどちらを優先するか、と問われれば、筆者も後者を優先する、と答える。実際、熊本に移ってからも、あるいは前職で岩手にいたときも、あれこれ試して教育現場を変えていくことに注力してきたと改めて気づいた。なるほど、彼の言うことも一理ある。良い教育をつくりたくってこの道に進んだのだから、当然といえば当然だ。

デザイン研究が学習科学者の間で定常化した。一回単発の実験室的研究の結果をまとめた論文で理論構築を目指すよりは、長期にわたる実践者との共同作業によって、理論で実践を設計・実施し、実践から理論を構築・精緻化していこうとする研究者が増えたという。その分、論文量産体制は脆弱化したかもしれない。しかし、実践現場に与えるインパクトがより大きい論文が産み出される傾向にあるとすれば、それは歓迎すべきことだ。研究のための研究で終わらせたくはない、と誰もが思うことだろう。

構成主義心理学の鍵概念の一つとして、アーティキュレーション (Articulation) の重要性が主張されてきた。明示化、詳述、分節化など、なかなか訳語が定まらない



ようだが、外に出すこと、つまり「知識や思考を言語化するように促す」（『学習科学ハンドブック』邦訳 p.43）ことで省察の素地をつくる効果をねらう。プロトコル分析法で用いられる何を考えているのかを言わせること（シンキングアウトラウド）、最近の言い方だと「見える化」に通じる。

良い実践をつくっていくことは重要だが、実施しているだけでは学習者にも第三者にも何を意図しているかは伝わりにくい。何故この手法を選択したのか、それはどういう効果を狙ってのものなのか、現状にどの程度満足しているのか、それはどういう理由からか。様々なことをやりながら即断即決していくのが新しい実践を作っていくプロセスでの常識であるが、それを「見える化」すると、それはそれでまた、新しい発見がある。省察して気づきを得る前提になるのが、今何をやっているのか、何を考えているのかなどを詳細に述べてみることである。受講者や第三者の利益になるばかりか、実は、実践者自らが学ぶことが多い。

論文を執筆することは「見える化」の一形態である。しかし、アーティキュレーションの目的のためには、論文を投稿するまでの必要はないかもしれない。実践集団内での話し合いや確かめ合い、あるいは関与者への説明と意見聴取等の形でも「見える化」は可能であろう。さらに、第三者への説明が可能な状態になれば、それを全国大会において披露し、意

見を求めることもできる。そういう中間的な「見える化」を経て、究極のレベルでアーティキュレーションをする場が、論文誌への投稿ということになる。学会に属する研究者なのだから、それを常に視野に入れておきたいものだと思う。筆者のように、実践をより良くするための「見える化」としての研究報告であると位置づければ、論文投稿への意欲も高まるという人も少なくないのではないか。

実践と研究の一体化は、学びと応用の一体化を主張したコルブの経験学習論にも底通する。具体的経験→省察的観察→抽象概念化→能動的実験の4段階を繰り返して学習が進むというコルブの学説は、学習を「知識の習得と、その応用」の2段階とは見なさないことがビジネス界での注目を集めた原因とされている。コルブにとって学習とは、知識を受動的に覚えることではなく、「自らの経験から独自の知見（マイセオリー）を紡ぎだすこと」である。とにかく実践してみて、具体的な経験を積む。それを「見える化」して振り返ることによって、独自の知見に概念化し、次の実践の場でそれを試す。その繰り返しそのものが「学び」である、という学説であるが、これは教育実践を対象に研究を進めるプロセスそのものだと言えよう。

教育実践をどう捉え理論化するか。理論化するためには、過去の理論との比較において新規性がなければならない。論文採択の要件の一つである。マイセオリーが単なる独善的なものであり、他との比較に耐えられないのでは困る。しかしその場合でも、親となる理論を応用した別事例が実践されたと位置づけることで理論の妥当性を高めることにも貢献できるし、理論の一般可能性の裏づけとすることもできよう。これは実践論文として投稿に値すると思う。

他方で、もしも他との比較に耐え、なおかつ実践に裏づけられた学術的新規性を有する理論が構築で

きたのであれば、それは原著論文としての採録に値する研究成果である。良い実践事例ができたことに加え、他の実践にも影響力を行使することができそうな理論も合わせて提起できることになれば、一石二鳥。これがデザイン研究の醍醐味である。

駆け出しの頃、「研究者の目を持った実践者と実践者の目を持った研究者の両方が必要だ」という教えを恩師から受けた。なるほどそうだな、と今改めて思う。「自分の実践を研究対象にすることで、紺屋の白袴の轍を踏むな」とも教わった。実践者との共同作業も魅力的だが、研究を自分自身の実践に生かすことから始めなければ、とつくづく思う。

最近の論文執筆といえば、もっぱら自分の大学院生の業績確保がその主目的になっている。博士論文には査読論文3本分のネタを仕込んでその共通点を論文題目にすること。そのうち2本を在学中に採録済みにしておくと審査委員から文句が出ないよ、などと説教することが多い。学位審査を間近にした大学院生の立場からは、迅速な査読と丁寧なコメントがありがたいし、何よりも採択されることが学位請求条件に直結する一大事である。自分が査読する際にはそういう立場の人を念頭に置くように心がけているし、自分の学生が書いた論文（自分が共著者のもの）がそういう思いを共有している編集担当・査読者の手に渡ることを祈っている。厳格な中にも暖かい気持ちが共有されている本誌の編集委員であることを、とても誇りに思っている。

少なくとも筆者の場合、巻頭言を書いている暇があったら（失礼！）、筆頭著者として論文を書かねばならない。そうでないと、自分の院生にも示しがつかない。

さあ、皆さん、次は何について書きましょうか？論文なんか書いている暇はない、などと言わずに！